

## 少年時代の宝物

常務理事 山本 光則

NHK連続テレビ小説「なつぞら」が四月一日から始まった。

終戦の混乱時に東京の家族と離れ北海道の開拓地で十歳前後の少女「なつ」の生活からドラマは始まる。

戦争で亡くなった父の戦友の養女となり広大な大自然の中で強くやさしい大人たちに囲まれ成長し、アニメーターをめざして上京する物語。

ドラマ開始日に自宅で北の大地の映像をみかけたことがきっかけとなって、それからというもの子どもたちが登校後のセンター居室で、出張の時にはお昼時間にテレビを見ることができ、る食堂に出かけ、毎日この連続ドラマに釘付けとなる。

「なつぞら」の時代設定は、私が北海道で育った頃より二十年ほど前になるが、テレビで流れる広々とした原野、草地、農場、畜舎、学校の建物等は、私の少年時代の情景と重なって映り、私は半世紀も前の時代にタイムスリップし、少年時代の記憶を蘇らせ、何ともいえない郷愁にかられながら昔日の日々を辿ってしまう。

明治の初期に能登半島から祖父が入植した北海道南西部の開拓地は、社会資本の整備が遅れており、私が小学校に入学する頃まで町の中心部から離れた山間部には電線が通っておらず、暗くなるとランプの灯りで暮らしていた。東京オリன்பピックの前には電気が灯りテレビも冷蔵庫も普及し始めたが、道路は砂利道で車はほとんど走っておらず、我が家では馬車に乗って街に買い物にでかけ、搾乳した牛乳を運んでくれるトラックが通る国道までは毎朝馬車で運んだ。雪が深い冬期間は馬ぞりを使ったが、そりに乗ると寒いので馬の後をトボトボと歩いた。収穫した作物を運ぶのも買い物も全て馬にお世話になった。

北海道の開拓地の機械化は私が高校生になった頃に本格化、それまでは米や野菜作りや酪農も全てが手作業だった。そのため中学生になった頃から毎朝搾乳や草刈りの手伝いをして学校が休みの日は畑や田んぼの作業を手伝った。

私は四人兄弟の三番目で兄や姉が中学校卒業後に集団就職をして幾分か我が家の家計にゆとりが生じ高校に通わせてもらうことができた。卒業後は農家の後継ぎをしていた兄が都会でてしまったため私が家業を継ぐことになったのだが、東京のビルでネクタイを巻き働くサラリーマンの姿をテレビで見て憧れたのと、農家の大変さから逃げ出したい一心で、自分で進路を決め半ば強引に北海道を離れ上京した。両親には申し訳なかったが、この決断が結果として今日まで山村留学にかかわることになった。

大学卒業時に育てる会を知り、自然体験キャンプボランティアに参加した。

この時、自分自身子どもが好きであること、子どもと遊ぶことが好きであること、少年時代の遊びや暮らしを再現することで都市化社会の中で暮らす子どもたちに役立つことを知った。憧れていた都会の生活は貧しいなりに謳歌していて不満などなく挫折感も味わうこともなかったのだが、山村で子どもたちと数日間過ごした体験は楽しかった。育てる会の山村留学という斬新な教育運動に強く惹かれた。いや、心のどこかに逃げ出した筈の山村の暮らしに対する価値観が都会での暮らしの中で潜在的に逆転していたのかも知れない。

モノが溢れ限りなく利便性を追求する都市化社会で暮らす青少年に今こそ必要な体験は、自

然と対峙し、自然を慈しみ、助け合い暮らす農山漁村の生活と人と自然の繋がりについて体験を通して学ぶことだと思う。

農山漁村には生きる原点がある。人間の成長に必要な宝物がいっぱいある。わが国の青少年には一年間はともかく、夏休みや冬休み、週末を活用した農山漁村の自然と暮らしの場を提供することが私たちに与えられた責務であると思う。

育てる会で育った若者たちが休暇を利用して、高齢化が著しく荒廃化しつつある農山漁村にかけ、これら地域の持続と活性化に寄与するような取り組みを実現するのが長年山村留学事業にかかわってきた私のこれからのゆめである。

#### やまもと・みつのり

公益財団法人育てる会 常務理事。大学卒業後、育てる会に入職。山村留学指導員及び東京本部職員として三年間勤務し退職。出版社等三年間勤務後に育てる会に復職、六年間山村留学指導員として勤務後育てる会関西支部設立に伴い勤務の拠点を大阪に移し西日本方面の山村留学事業立ち上げや文科省や農林水産省委託事業を担当。育てる会関西事務局長を経て現職。趣味特技・野球、スキー、登山、釣り、歴史散歩、料理。CONE認定トレーナー、NEAL主任講師。